

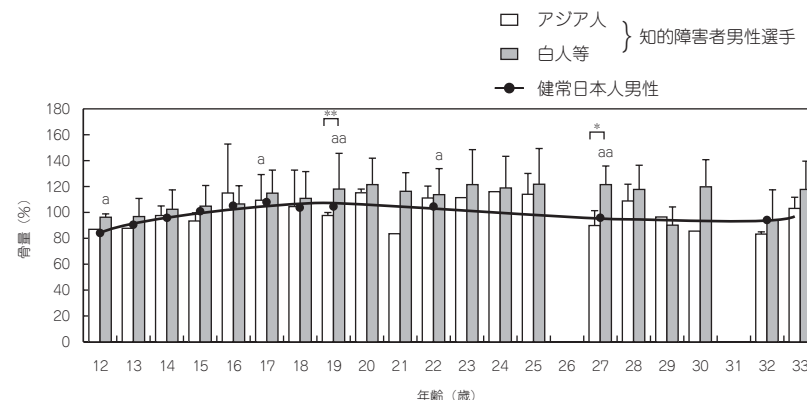
スペシャルオリンピックスに参加する知的 発達障害者における骨密度の実態調査と 低骨密度改善のための指導

研究代表者 辻学園栄養専門学校 青江 智子

世界人口の約3%を占める知的発達障害者の骨密度についての数少ない調査では、彼らの骨密度は健常者に比べて低い可能性が示唆されていました。本研究では、2005年長野で開催されたスペシャルオリンピックス冬期世界大会に参加した89名女子選手と321名男子選手を対象として、右足踵骨の骨量を定量的超音波測定法により測定し、その値を日本人健常者の各年齢の基準値および年齢回帰曲線と比較しました。その結果、この大会に参加した選手の各年齢層の骨量では、アジア人、白人、およびその他の選手の男女共に低下傾向は認められず、むしろ若年者においては健常者よりも高い傾向すら観察されました。これらの結果より、内分泌や日常生活にハンディキャップのある知的障害者でも、運動習慣を継続することにより高い骨量を保持できる可能性が示されました。



内分泌や日常生活にハンディキャップのある知的障害者も、運動習慣の継続により高い骨量を保持できるようだ



* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$ (アジア人選手と白人等選手との有意差)
a : $p < 0.01$, aa : $p < 0.001$ (白人等選手と健常日本人との有意差)

アジア人男性選手(知的発達障害者)の平均骨量は、健常日本人と差はなかった
白人等男性選手(知的発達障害者)の平均骨量は、健常日本人、またアジア人選手よりも高い傾向が観察された